

KATE2010 International Conference の報告

鹿児島純心女子大学 川上典子

1. 全体の概要

KATE (Korean Association of Teachers of English) の国際大会 2010 は、7月2日-3日にソウル国立大学で行われた。KATEは英語教育関連の学会としては韓国では一番古く、大きい組織であるとのこと、今回の学会は、梅雨の始まりと重なり初日の朝が大雨だったにもかかわらず、参加者は約400名という大きな大会になった。今回は Teaching and Learning English as a Global Language: Challenges and Opportunities というテーマが掲げられており、海外招待講演者が、David Crystal を始め、5名 Alastair Pennycook(University of Technology, Sydney, Australia), Robert DeKeyser(University of Maryland, College Park, USA), Ganakumaran Subramaniam(University of Nottingham, Malaysia), Suresh Canagarajah(Pennsylvania State University, USA)だった。この著名な学者の出身国を見るだけでも、まさにグローバルでテーマにふさわしく、発表件数は大学教員やアメリカでの博士課程の学生の研究発表、スポンサー付きの発表、海外からはタイや中国、そして日本からの発表(合計4件)等併せて60件もあり、大変ボリュームのある大会だった。

2. 発表内容

Keynote Speech の David Crystal は、Global English に対して electronically mediated communication (EMC)が発達し、それを challenges とともに opportunities とともに見ることができるが、EMCが英語という言語に革命的な影響をもたらしたとはまだ言えないという結論のようだった。(以下、大会要綱集から抜粋)There is very little sign of traditional spoken and written English being radically altered as a result of EMC...The result is a new palette of styles, or genres, of discourse, whose properties need to be understood, as can be seen in current trends in blogging and tweeting. The internet is also helping to break down the distinction between native and non-native speaker, and fostering new styles of English as a lingua franca.

Plenary Speech として、スリランカ出身の Suresh Canagarajah が、“New Definitions of English Proficiency and Changing Pedagogical Priorities”と題して、英語教育においてどの英語を規範とするか、英語の熟達度をどう定義するのかの問題提起がなされ、英語教育において language awareness, sociolinguistic sensitivity, negotiation skills がより大事になってくると結論付けていた。Alastair Pennycook は、global English に対し local English が対峙するのではなく、すべてのアイデンティティと言語使用は local であり、hybrid であり、global でもあるという認識を示していた。マレーシア人の Ganakumaran Subramaniam は、“Learner Directed Language Learning: Curiosity, Conceptualization

and Creative Expression”というタイトルで、教室で学ぶフォーマルな英語学習とは別に、学習者が自分の目標に合わせたインフォーマルな学習があり、後者は学習者の興味と探求学習によって言語習得になり、言語の概念化、言語使用につながると述べていた。ベルギー生まれでドイツ語、フランス語、スペイン語、英語等多くの言語を操る Robert DeKeyser は、“Age Effects in Second Language Learning and What They Mean for Instruction”というタイトルの発表で、データ結果をもとに、移民の英語習得が年齢だけでなくその他さまざまな要因が絡んでいると述べていた。

研究発表の方は、SLA, Curriculum/Materials, ELT Methodologies, Teacher training, Applied Linguistics の領域に分けられており、さまざまな発表があった。特に興味を引いたのは、British Council による英語による授業の進め方のコツについてのプレゼンテーションで、韓国では英語による英語授業が進められていると聞いていたが、実際の現場ではまだ英語による英語授業は浸透していないのかなという印象を受けた。私の発表は日本の小学校英語教育の現状と教員研修について発表したが、海外の英語教育事情にも興味を持って熱心に聴いてくれ、その上、韓国の研修についてのコメントをもらい大変ありがたかった。JACET の会員として、早稲田大学の中野美知子氏は“CEFR-Based Curriculum Development and English Tutorials: Transition from Secondary to Tertiary Education”について発表されていた。その他に、日本からは、Tomoyuki Kawashima 氏、Yuzo Kimura 氏の発表があった。

3. 個人的な体験として

私は、JACET 代表として 1 日から 4 日までソウル国立大学内の Hoam Faculty House に滞在した。高麗大学の院生が空港から大学間を行きも帰りも送迎してくれ、大変ありがたかった。ソウル国立大学は市街地から少し離れていて、しかもキャンパス内が大変広く、坂が多いため、どこに行くにも車の送迎があり、結果的に自分でソウルの街を歩く機会はなかった。昼食も夕食もゲスト用に準備されていて大変な御もてなしを受けた。初日夜のレセプションでは、多くの参加者と交流でき、ソウル大学の学生の生演奏や伝統音楽のパンソリの披露もあった。学会中は、フリーの飲み物やお菓子が置いてあったり、大会最後の総会ではスポンサーの出版社からの寄付品の lottery が行われて、大会運営がとても潤沢である印象を受けた。大会は、最後の総会以外はほとんどすべて英語で行われていた。

今回、JACET 代表として海外招待講演者と同様に大変温かい歓迎を受けた。KATE は、日本の隣の国で距離も近く、時差もなく、英語教育には大変熱心で、海外学会で発表をしたい JACET 会員にとっては、大変発表しやすい学会だと感じた。これから、ますます KATE と JACET 間の会員同士の交流が盛んになることを祈念したい。